■作品タイトル

『薬師堂の夜』

■著者名

森水陽一郎

■元にした作品タイトル

『高野聖』泉鏡花・作

■文字数

4999 文字

■あらすじ

便利屋を営む私のもとに、奇妙な依頼が舞い込む。ここ半年ばかり、千葉の勝浦にある廃寺に、動物の剥製の不法投棄が続いているという。地区長が熱感知式のカメラを仕掛けるが、なぜか犯人の姿は写っていない。私は寝袋を持ち込んで、廃寺の薬師堂に泊まり込むことになるのだが･･･。

薬師堂の夜

便利屋では手にあまる奇妙な依頼だった。

千葉の勝浦に、薬師堂だけの小さな廃寺があり、ここ半年ばかり、堂内に不法投棄がされているという。それが冷蔵庫や古タイヤや空き缶のたぐいではなく、動物の剥製というから首をかしげてしまう。

月に一度、善意の掃除に訪れる地区長さんの話によると、はじまりは年明け、堂内の隅にクマネズミが五匹ほど団子を作っており、寄っても逃げず、棒でつついてはじめて、息がないことに気づかされた。

冬眠でも死後硬直でもなく、ほぐすとそれは、たしかによくできた剥製で、曲がった体を知恵の輪のように絡めている。鼻をつく異臭も虫もなく、毛並みにはまだ濡れたような艶があった。

供養のためのことづてもなく、さてどうしたものかと、ひとまず自宅に持ち帰り、防虫剤とともに衣装ケースに納め、目隠しの布をかけて納屋で保管した。焚き上げの機会を待つことにした。

翌月はアナグマだった。堂内の板の間で、安心しきったように横並びで川の字を作り、へそ天で万歳をしている。もちろん猟師の貯蔵庫として使われておらず、内陣はすでに空っぽで、捧げるべき対象物の影さえない。

錠前を二つに増やしたが、翌月にもまた、アオダイショウの剥製が、我こそがご本尊とばかりに、何匹かでヘビ玉を作っていた。通報を受けた駐在所の警官は、苦笑いを浮かべて警棒でつつき、なんだか手の込んだいたずらだけど、被害者がいないからなあと、方策を先送りした。

たしかに錠前の破壊もなく、建物を傷つけてもいない。放火や死傷者がないかぎり、警察は本気で動かないだろう。実際、本署から応援は来なかったし、その後の事情聴取もなかった。１１０番に直接かければ話は変わるだろうが、地区長もまた、そこまで大ごとにするつもりはなかった。

「それで取りつけたのが、あれです」

七十がらみの、よく日に焼けた野良着姿の地区長が、お堂入り口の垂木を見上げる。野生動物の観察にでも使うような、文庫本サイズの箱形のトレイルカメラが、針金で固定されている。
「赤外線に反応して、自動でシャッターが切られるはずが、実際に写ったのは、境内の草をかじるキョンばかりで」
「キョンって、小さい鹿の？」
「ええ、ずいぶん前に潰れましたが、近くに動物園がありましてね。そこから逃げて、いまはもう、勝浦はキョン天国です」
「ちなみにヘビのあとは」
「干しガエルです。賽銭でも投げ込まれたように、三十匹ばかり床に散らばってた。剥製というより、標本に近いかな。まあどちらにしても、犯人は姿を見せなかった。カメラが人の熱を感知しなかった」

翌月は、中身が空っぽの亀の甲羅が、木魚の墓場とばかりに板の間で小山を作っており、そうして今月もまた、姿なき何者かが訪れる、闇が濃くなる新月が近づいている。
依頼は単純だ。この土地に関わりのない私に、新月をはさんだ二泊三日、堂内で寝泊まりをしてくれないかと。犯人を引っ捕らえるとか、警察に突き出すとか、そういう物騒な結末ではなく、ただ真相を知りたいらしい。無礼や不手際があるのなら、できる範囲で改めたいと。
言葉は濁したが、おそらく地区長自身が手を下さないのは、よからぬ恨みを買いたくないのだろう。まだ何か隠しごとがあるのかもしれないが、少なくとも境内を取り囲む竹林に朽ちた捨て墓はなく、底の見えない古井戸が隠れてもない。
そこまで高額な依頼料ではないが、さいわい拘束時間は夕暮れから夜明けまでで、いまの季節なら九時間でおつりがくるだろう。寝袋の野宿となるが、バックパッカー時代に鍛えられている。置き引きとクマの恐怖がないだけまだましだ。

すぐに動けるよう、テントは持ち込まなかった。蚊取り線香を焚いて、防虫ネットをかぶり、ごろりと板の間に横になるだけだ。もし入り用があれば、隣町の自宅まで車で三十分、その気になればトレイルカメラの画角からそれて、こっそり薬師堂を抜け出し、インチキの車中泊もできてしまう。

一日目、日が暮れるまでに堂内にリュックを運び入れ、どこに寝床を作るべきかと思案しているさなかに、ふいの来客があった。

開け放たれた木戸の向こう、草むした境内に、柳行李を両手で抱えた浴衣姿の女性が立っており、目が合うなり、迷いのない足運びで薬師堂へと近づいてくる。年のころ三十半ば、色白の首を際立たせるくくり髪で、お多福じみた柔和な笑みを浮かべ、話なら聞いてますとばかりに目礼をする。

「地区長さんの？」

頼まれごとですかと、続けるまでもなく、女性が小さく首を振り、階段下で足をとめる。目に涼しい生成りの浴衣には、鳥獣戯画に出てくるユーモアたっぷりの図柄が描かれ、すそあたりでウサギがひっくり返っている。

「寝られませんよ、寝袋じゃあ」

「はい？」

「ここの地名はご存じで？」

「えーと、たしか勝浦の、ヒエダ？」

「ヒルタ。陽がとどまる田んぼで、陽留田。でもそれは明治になってから。昔はジメジメの湿地で、見捨てられた土地だった。油断をすると、すぐに血を吸われた」

「それは、ヤマビルの？」

「そう、蛭が多いと書いて、蛭多。先祖返りじゃないけど、ここ何年か、またえらい増えてね、かわいいお運びさんのせいで」

「キョン」

女性が満足げにうなずき、自身のすそに目をやる。

「まったく、ウサギ並みの繁殖力で、ひっくり返るのはこっちのほう」
「じゃあ、草履でそこにいたら」
「いい？　お邪魔しても」
　返事を待たずに、女性がすべるような足取りで、階段を上がり、ふうと一息、堂内の板の間に柳行李を下ろす。
「開けてみ、よぼよぼの白髪になるから」
　私は愛想笑いを返し、念のため心がまえをしてそっとふたをひらく。なんだろう。漁で使う投網のような、黄ばんだ色合いの細かい網が、幾重にも折り重なっている。
「蚊帳よ、蚊帳。それも特製のね。ほら、ここにファスナーがあるでしょ。すっぽりと袋になってる。じゃないと床板の隙間から、もぞもぞ這い上がってくるから」
　手に取って軽く広げると、たしかに底の部分が布地に工夫され、ファスナーがへりにそって走っている。塗香らしき芳香がほんのりと鼻先をかすめ、すぐに蚊取り線香の煙にかき消されてしまう。
「失礼ですが、ご近所のかたで？」
「海沿いに出るまでに、郵便局があったでしょ。その裏に小さな内科医院がある。そこの人、手伝いをしてる。地区長さんは、まあおなじみさん。耳をふさいでも、あなたが来ることは聞こえてる」
　ご丁寧に、吊りひもとフックまであり、さっそく二人で蚊帳を吊りにかかったが、堂内の中央ではひもの長さが足らず、大胆で罰当たりだが、奥の内陣に陣取って、欄間にフックを掛けるのが都合がよさそうだった。
　すでに堂内は薄暗く、浴衣姿の曲線がなおさら浮き立つ。そのまますると蚊帳の中にすべり込み、気がつけば朝を迎えそうな、じっとりと湿ったなまめかしさを秘めていたが、意味ありげな目くばせもなく、女性はうなじの残像を置きみやげに、すっと白魚の後ろ手をあげ、薬師堂を出ていった。

竹林で小用をすませ、靴を脱いで蚊帳にもぐり込んで、ごろりと横になったが、場所が場所だけに、なんだか居候の寝仏にでもなったようで、妙なこそばゆさがあった。

さて、何をして時間をつぶそうと、肌着姿になって毛布がわりの寝袋にもぐり込み、スマホを顔のそばに立てかける。まるで興味を引かれない。それに疲れていた。朝から庭木の手入れと草むしりの案件をこなし、夜の分までまかなおうと、大盛りのタンタンメンで、すでに腹ごしらえをすませている。

不思議と気味悪さはない。あたりは静寂とはほど遠く、むしろ命の気配に満ちている。閉じられた木戸ごしに、鋭くとがった鳥の鳴き声が聞こえては遠のき、寝る前のストレッチでもするように、ときおり床板や壁が、ミシッと気まぐれなラップ音を立てて、子守歌の任をつとめる。

まどろみの手がまぶたにふれ、ふと目を覚ますと、すでに漆黒の闇だった。夜半の湿気で消えたのか、なじみの線香の香りがなく、ほのかに鉄臭い雨上がりの土の匂いがする。天気予報は太陽マークが続いていたが、通り雨でも降ったのだろうか。

腕を出し、立てかけたスマホにふれると、時刻は午前一時過ぎ、六時間ばかり泥の眠りをむさぼったことになるが、かたい床のせいで、関節の節々がこわばっている。少なくとも、乱暴な木戸のノックはなく、床板を踏みしめる足音も聞いていない。

念のため、堂内の床を照らそうと、スマホのライトをつけて蚊帳の網目に近づけたところで、息がつまり、すべり落としそうになる。ぼんやりと照らされた蚊帳の生地に、無数の黒い点が浮き立ち、よく見るとその先端がうねうねと動いている。頭を突っ込み、蚊帳の中にもぐり込もうとしている。

山蛭だ。飛び起きる勢いで、寝袋のファスナーを開け、明かりを床に這わせるが、さいわい潜入はない。顔にまとわりついてもいない。息をのみ、あらためてライトを蚊帳の生地に近づける。十匹百匹の話じゃない。側面

四枚だけでなく、天井の網目にもやはり、何百という黒い点がうごめいている。

叫びたいが逃げ場がない。手の甲で、横の布地を軽くはたくと、肉のかたまりが落ちるような、ドサッという鈍い響きが床を打つ。それは山蛭ではない。奴らをさらに大きくした何かが、分厚いうねった壁となり、この蚊帳を覆っていることに気づかされ、背筋が冷たくなる。

枕元のリュックに殺虫剤の缶があるが、手を伸ばす気になれない。無益な殺生とはまた違う、決断させないためらいのもやが、胸の奥底に渦巻いている。恐ろしいが、命を断ち切るまでの道理がない。訪問者が誰なのかを知るのが託された依頼だ。

できることはかぎられている。抜け出た寝袋の上であぐらを組み、うろ覚えの般若心経を唱えて、敵意がないことを示す。もし成仏できない何かなら、その手伝いをささやかながら買って出る。蚊帳がひしゃげたら一巻の終わりだが、そのときは寝袋を繭にして、籠城の亀になろう。

半時間は唱えただろうか、あらたな訪問者も、木戸を破る大足もなく、ふいに肩が軽くなるような心地がして、板の間を打つ雨音が聞こえた。ポトリと鳴ったそれは、たしかに蚊帳の壁から剥がれ落ちた、山蛭に似た何かで、落涙を思わせる、どこかもの悲しい響きで、またポトリ、ポトリと、あとに続いた。

読経に疲れて、うたた寝をし、木戸の隙間からうっすらと青白い朝の気配が差し込んだときには、すでに蚊帳の壁から黒い斑点は消え失せ、ようやく私は、ひと夜の牢獄から抜け出すことができた。

便利屋失格だが、その日をかぎりに依頼を放置した。薬師堂に蚊帳を残し、車での帰路、お礼のメモだけでもポストに投函しようと、郵便局の裏手にまわり込んだところで、言葉を失った。

どこにも内科医院はなく、古びた民家の並びに、ゴミ集積場をかねたちょっとした広場があるばかりだ。話を聞きたいが、早朝で人はなく、地区

長もきっと寝ているだろう。それでも私はむきになって、人を探した。

海へと下ってすぐ、ビニールハウスの並びに農夫の姿があり、イチゴの甘い香りに満たされるなか、話を聞くことができた。

「裏の内科？　ああ、わしの子供のころだから、もう五十年になるな。先生の若奥さんが、むずかしい病気になってね、最後は痩せ細って、ヒルタの廃寺で死んだ」

「死んだというのは、葬式を？」

「いや、どんな考えか知らんが、最後は森に食うてもらう言うて、先生が薬師堂に運び込んだんだ。それで揉めた。見つかったときには、人間の姿をとどめてなかったから。死体遺棄じゃ、人殺しじゃ言うて、長いこと裁判したけど、結局先生は地区に戻らんかった。建物も残らず壊された」

残酷ではあるが、そこには鳥葬や風葬を思わせる、命をゆずり渡す神聖な風景があった。あの女性は、誰なんだろう。幽霊にしてはあまりにも肉感的で、実際に蚊帳にもふれることができた。

薬師堂に捧げられた剥製たち。それは森を肥やし、死者を悼む、象徴としての供物（くもつ）なのだろうか。それとも医者の残心がもたらした、かなわなかった亡き妻の涅槃図なのだろうか。

深入りはそこまでにして、あとは空想の余韻で帰路につく。

生きた人間よりも色鮮やかで、忘れがたい、ふいの寄り添いとともに、風のように立ち去った浴衣姿の女性。おそらくその姿は、トレイルカメラに写らない。だからこそ私はそこに、差し伸ばされた薬師如来の、慈悲の手を思い重ねる。